

京都・伏見城跡

1 所在地 京都市伏見区東組町

2 調査期間 一九八五年（昭60）一〇月～二月

3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所

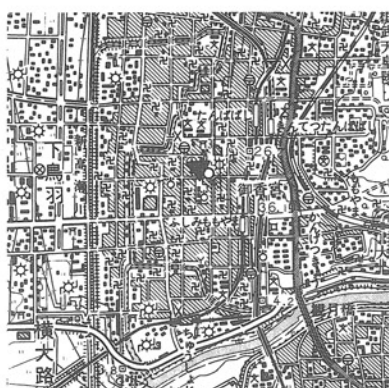
4 調査担当者 小森俊寛・上村憲章

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 桃山時代～江戸時代初頭

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、伏見丘陵西側の平坦地で、伏見城下の中央西寄りに位置している。江戸時代に作成された『豊公伏見城絵図』などによれば、武家屋敷の一面に位置し、高橋七兵衛の屋敷地と推定される場所である。



(京都東南部)

検出した遺構は、平安時代後期に埋没した二条の溝を除くと、すべて桃山時代以降のものである。

木簡は、径約八m深さ四mの円形の掘込み一、一

辺約一〇m深さ四・五mの方形の掘込み二、一角を調査したのみで形状・規模の不明な掘込み四、及び江戸時代以降の攪乱坑六から出土した。ここでは墨痕が比較的よく残る一五点を紹介する。

掘込み一・二は、ともに底部から時計回りに登るスロープが作り出されていて、井戸のような貯水施設をもたない。伏見城下では他にも発見例のあるもので、築城時の土取り穴と考えている。江戸時代前期には埋没しており、木製品を含む大量の遺物が出土した。

なお、紹介するもののほかに、墨痕のない木簡状の木製品が掘込み一から二点、掘込み二から二点出土している。

8 木簡の积文・内容

掘込み一

(1) ・「くたい二つ」

・「みやかわ
文五郎殿まいる」

123×21×3 033

(2) ・「清カ」

・「」

(74)×20×2 039

(3) ・「代カ」

・「きく」

106×19×2 032



攪乱坑六

(13)

・
[
○ □ □ 保 □ □ □ □]
[わカ]

160×33×7 051

(14)

・
[
× □ □]
]

115×44×9 011

(15)

・
[
□ □ □ □ □]
]

71×(21)×4 065

(1)は、「た(多) い二つ(川)」とあり、鯛二疋に付した荷札。「み(ミ) やかわ(可王)」は地名であろう。(2)は頭部を丸く削る。(3)は切り込みの上辺が弧を描き下辺は直線にする。(5)は、裏面上端を斜めに削る。(6)は、染め革に付けた荷札で二九枚の「むらさきかわ(起可王)」「紫皮」と六一枚の「し(志) やうふかわ(可王)」「菖蒲皮」を音物として「す(春) るか(駿河)」から送ったもの。「大浜一右」「河三右」は、送り主二人の名前であろう。菖蒲革は、藍染めの鹿皮で草花の文様を白くおいたもの。京都の八幡の染革が有名で、菖蒲を尚武・勝武に寄せて多く武具に用いられた。紫革も鎧・刀装・皮足袋などに用いられている。(7)は、下半の表面右角から裏面左角にかけて斜めに径二mmの穿孔があるが、木簡の内容や用途には

関係ないものであろう。

(10)は、上部に切り込みの痕跡が残る。(12)は、上下に木組みの切り込みがあり、右側面の四力所に釘孔が認められる。折敷の縁板に墨書したものであろう。(13)は、上部に径五mmの穿孔を施す。(15)は小型の曲物の底板に墨書したものの。

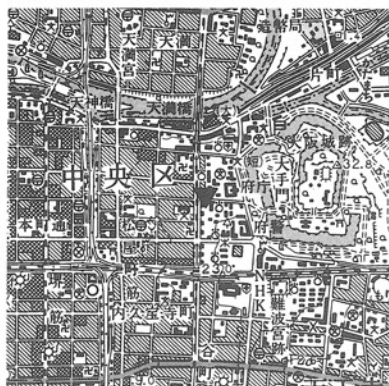
なお、木簡の釈読にあたっては、京都大学の西山良平氏、京都橘大学の有坂道子氏、滋賀県立大学の東幸代氏のご教示を得た。

(原山充志〈京都市考古資料館〉)

大阪・大坂城跡

おおさかじょう

- 1 所在地 大阪市中心区谷町二丁目
- 2 調査期間 OS〇五―三三調査 二〇〇五年(平17) 七月、八月
- 3 発掘機関 (財)大阪府文化財協会
- 4 調査担当者 平井 和
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 豊臣氏大坂城前期(一五八〇年―一五九八年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部)

調査地は大坂城の西方に広がる武家地の一角にあたり、大坂城大手門から約五〇〇m西方、大手通の南側に位置する。調査面積は二七〇㎡である。木簡は、豊臣氏大坂城前期(天正八年(一五八〇)―慶長三年(一五九八))に属する廃棄土坑から計六点出土した。廃棄土坑は一三基確認しており、木簡は漆製